

胡蝶蘭



札幌医科大学医師会
札幌医科大学 医学部附属フロンティア医学研究所

三 高 俊 広

大学に入ってから40年近く通い続けた研究所も、今春には解体が始まる。人生の半分以上を過ごしてきた建物が無くなると思うと感無量ではあるが、新しい所に移れる喜びの方が大きい。私で3代目に当たる教室には、今や遺物に転じた昔の財産が狭い研究室に散在している。昨年春頃より徐々に進めてきた片付けも、あと少しである。

些細なことであるが、心配なこともある。15年以上前になるが、昇進祝いに胡蝶蘭を頂いた。白い大輪の3本立てであった。花に特段関心があったわけでは無かったが、一月経ってもきれいなまま、品良く咲き揃っている花が存在するとは知らなかった。最後の1輪が落ちるまで2ヵ月ほど楽しませてくれた。魅せられた。胡蝶蘭の栽培の本を買い、鉢に植え替えた。

水苔の表面が乾燥するまで水を遣るな、肥料もあまり遣るな、とあった。当初は、10日に一回ぐらい水道水をそのままタップリ与えるだけで放っておいた。そのうち、茎から根が出てきて、新葉が出てくる。年が明け、最も寒さの厳しい頃になり、芽が出てきた。どんどん上に伸びる。そのうち支えないと折れそうなので支柱を立て、蕾が出てくると支柱を曲げて茎もそれに沿わせる。先は上に伸びようとし、蕾は日光が当たる方に向く。向日性である。

植物の栽培は小学生の時の朝顔以来であり、手をあまり掛けないでもきれいな花が咲くことにもびっくり。花の方向はバラバラで頂いた時のように揃ってはいないが、確かに胡蝶蘭であった。部屋にある不揃いの胡蝶蘭に気が付いた人は、「咲かすのは難しいのによく咲いたね」と言ってくれる。「どこが難しいのだろう？」と不思議に思っていた。店で買った苗から育てても咲いた。

年に1度か2度、毎年咲く。しばらくして気が付いた。毎年花を咲かせられるのは腕ではなく、この建物のお陰である、と。50年程前の建物である。窓ガラスは厚いが一層で、隙間からは冷たい風が入り、スチーム暖房が窓下にある。朝昼晩とカンカンという音とともに暖房が入る。胡蝶蘭は熱帯ジャングル原産、寒さを嫌う。15度を下回らないような所で栽培しなさい、と書いてある。しかし、花が咲くには低温期が必要である。私の部屋は、暖房の入る前の10月が最も寒く、暖房が入る11月には一気に温度が上がる。蘭にとって適温となる。窓と廊下の温度差で対流が起こり、適度の空気の流れもできる。大学

の水には鉄分が多い。当初はほとんど水しか与えなかったが、花が咲いたのは水のお陰？ 最も古い株は15年以上経つ。

蘭は花を咲かせるまで3年ほど必要なので18歳以上だが、枯れるまでが寿命という。液肥をあげるようになってからは花の付きは格段によくなった。より美しくするには、たまにはエサをあげなければならないようである。新棟工事中は陽当たりが悪くなり、花が咲かなかった。環境に敏感である。

新棟は人間にとって快適な空間になっているはずである。植物にとって良い環境であるかどうかは、栽培してみなければ判らない。それが少しばかり心配なのである。快適なこと、便利なのはうれしいが、体が慣れてしまうとすぐに耐性を失ってしまうのが人である。植物のように環境に敏感でいられればよいが、ますます鈍感になりそうで怖い。胡蝶蘭は観ていて心を和ませてくれる。退職までは、花を咲かせ目を楽しませてくれることを願っている。

